

ニュースレター

NO. 19

2005.7.1.

名古屋大学大学院国際開発研究科

発行 ☎ 464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ (052) 789-4953

FAX (052) 789-4951

GSID ホームページ <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

国際開発研究科で何を学ぶか

—専攻長からのメッセージ—

国際開発専攻

教授 廣里 恭史

国際開発専攻は、経済開発、開発マネジメント、農村・地域開発、教育・人材開発といった国際開発における重要課題を理論と実践の両面から体系的に研究・教育することを目指しています。教員は、それぞれ国内外での研究・教育そして開発実務経験を豊富に持っており、一つの学問領域に囚われない学際的な研究・教育活動を特徴としています。貧困など今日の途上国が直面する問題は、複雑な要素が絡み合っており、その問題の理解と解決への道筋を明らかにするためには、一つの学問領域のみでは対応出来ません。国際開発に携わる者は、経済開発理論の習得だけではなく、農村開発や人的資源開発への配慮も求められます。また、教育・人材開発に携わる者は、教育政策・計画や教育内容についてはもとより、理論的土台として経済開発における人的資本の役割などへの理解が不可欠です。それぞれの専門性を追求しながらも、自身の研究関心を学際的に位置づけることに心がけ、そして他の学問領域がどのように開発問題に対処しているかを理解することが大切です。

そして、皆さんには将来、自分が専門的に関わるそれぞれの分野で大いなる夢を育ててほしいと思います。しかし、その夢に近づくためには、日々の小さな努力を地道に積み重ねる必要があります。皆さんが、教員とともに、その為の基礎を習得し、具体的手順を明確にすることが出来ると確信しています。

国際協力専攻

教授 大橋 厚子

国際協力専攻は、開発問題をセクターやディシプリンに限定せず問題自身を専門的に掘り下げるのに適した専攻です。研究可能な問題群は、「開発と法」、「平和構築」、「ガバナンス」、「社会開発（貧困削減・ジェンダー・参加型開発が主）」、「ジェンダーと開発」、「開発と文化」、「開発下の社会変容」、「多民族社会論」などですが、院生が常に新しい知識を吸収し得るように工夫をしています。国際開発・国際コミュニケーション専攻との壁を低くし、また海外実地研修・国内実地研修等の実習、および開発実務家の担当する講義も履修しやすくしています。正規の科目以外のPCM研修、各種インターンシップ参加も積極的に奨励しています。教員のディシリンは、法学、政治学、社会学、歴史学、地域研究と多彩で、院生各自のキャリアプランに

必須の専門能力を体系的に修得できるように科目選択の指導に力を入れています。さらに国際協力専攻では、日本人および日本語を主な学習言語とする学生が、開発分野あるいは国際交流分野で専門的な職業人として働くための知識とスキルを効率よく習得できるように、英語を話す留学生と英語で議論する一方で、基礎事項を日本語で学び、日本語で本格的な論文・調査報告書を書けるコース編成をとっています。

皆さんの熱意を形にするお手伝いをしたいと思っています。

国際コミュニケーション専攻

教授 二村 久則

国際コミュニケーション専攻では、開発途上地域をはじめとするさまざまな地域と国々の間の人間関係および文化の交流について正確な知識を学び、現代国際社会の諸問題を多元的な視点から分析・理解できる能力の養成をめざしています。私たちの専攻では、国際コミュニケーション論、異文化理解、文化人類学、地域研究、言語学、第二言語習得論、外国語教授法などさまざまな領域の研究を行なっていますが、どの分野にも共通して言えるのは、異文化理解能力と国際コミュニケーション能力を身につけ、国際社会および高等教育分野で文化開発関係の専門職に従事し、プロフェッショナルとして活躍できる人材の育成を目的としているということです。異文化を理解することなくしては国際社会で活躍することはできません。またコミュニケーション能力を持たずして国際社会のさまざまな人々と交流することは不可能です。幸い国際開発研究科では、世界のいろいろな地域からの留学生が院生全体の半数を占めています。また教員もその大半が異文化や国際社会に関わる豊富な経験を積んでいます。こうした恵まれた環境を大いに利用し、同窓の仲間や教員と知的な交流を深めて、皆さんが十分な専門的知識と能力、そして豊かな見識を備えたプロフェッショナルとして育ててくれることを期待しています。



左から廣里専攻長、大橋専攻長、二村専攻長

2004年度学位授与状況

2004年度に当研究科より授与された博士学位数は、論文博士3名、課程博士24名（うち留学生13名）。課程博士取得者を専攻別で見ると国際開発専攻（DID）9名、国際協力専攻（DICOS）7名、国際コミュニケーション専攻（DICOM）8名となっている。一方、修士学位取得者は75名。



国際開発専攻



国際協力専攻



国際コミュニケーション専攻

2005年度入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	(42)<27> 68	(19)<13> 27	(16)<12> 23
国際協力	(35)<16> 63	(19)<10> 28	(18)<10> 25
国際コミュニケーション	(39)<39> 56	(18)<13> 26	(18)<12> 25
合計	(123)<82> 187	(56)<36> 81	(52)<34> 73

注) () は女子、< > は外国人留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	(6)<11> 13	(6)<8> 10	(6)<8> 10 《6》
国際協力	(5)<11> 15	(4)<9> 13	(4)<9> 13 《5》
国際コミュニケーション	(12)<9> 19	(8)<5> 12	(8)<5> 12 《8》
合計	(23)<31> 47	(18)<22> 35	(18)<22> 35 《19》

注) () は女子、< > は外国人留学生、《 》 は進学者で内数

修了生の声



Department of Economics,
University of Karachi,
Pakistan

Dr. Abdul Waheed

What was most difficult for you during the doctoral course? How did you overcome those difficulties?

No doubt beginning of every task is crude and difficult. At many stages we feel that it is not possible to survive and finish the task. But with hard work and firm determination all doubts and prophecies can be proved wrong. The courage, determination, power of endurance, patience will overcome all difficulties and finally surprises the world. During Ph.D. studies the role of academic advisor is also very important. He stands with his student through thick and thin and guide him in woes and weal. He never deserts or leaves him in crisis, which is the true touchstone of his sterling qualities — self-confidence, determination and dedication. Lucky, I

was assigned an advisor with more than above-mentioned qualities. I will take this opportunity to sincerely thank my academic advisor, from bottom of my heart, for whatever he did for me. It was a great honour for me to be his student.

Did you participate in any academic conferences in Japan?

I participated three academic conferences in Japan — 3rd and 4th Special Study Meeting of Japan Society for International Development (JASID) and 2nd International Conference of Japan Economic Policy Association. I believe that for Ph.D. students the participation in the conference is very helpful. By this way they could be more confident that their research findings are passing through screening process. It is also helpful to make publications after incorporating the comments of the discussants.

What advice can you suggest for GSID students?

For successful completion of Ph.D. studies, it is must that we have to be a great reader because the more we read the more we learn. During my Ph.D. studies I followed the same principle and learnt a lot. I am also satisfied that my learning was very thoughtful, because I know that learning without thought is labor lost. Furthermore, we know that man is great not by what he is, but by what he does. This demands strong character, firm determination, quick decision and great vision. It requires firm belief in the mission, deep insight into the problem, and uncompromising zeal to tackle the problem. It also requires strong convictions, tireless work, and patient thinking. I believe that high intelligence, courage, keen judgment, and spirit of dedication are the qualities most essential for a person to be successful in his academic and non-academic life.

What suggestions do you have for improvements at GSID?

Universities produce gentle persons with balanced personality, broad vision, wide sympathies, consciousness, tolerance, service to humanity, moral courage, honesty and love for learning. Academic life in Nagoya University and GSID is of high standard but there is still room for improvement. There is need for close working relationship between academic advisors and students. One-year course work should be introduced for Ph.D. students. At least, one international and one domestic conference should be held at GSID, where Ph.D. students should be encouraged to present their research findings. Furthermore, group discussion classes and tutorial classes by Ph.D. students for Master and research students

could also be helpful for all and will establish relationship between juniors and seniors.

愛知新城大谷大学

助教授 平林 健治

GSIDでの博士後期課程の3年間は、本当に様々な方にお世話になりました。今こうして無事に「修了生の声」を書かせていただけるのも、御指導いただいた先生方、GSIDの職員の皆様方の御蔭であり心より感謝申し上げます。振り返ってみますと、この3年間というのは時間が大変はやく経ってしまったような気がするのですが、私にとってとても貴重な時間であったことを今しみじみと感じております。

入学した当時は、正直言って自分の能力で博士論文を本当に書き上げられるのだろうかという不安にさいなまれ、フルタイムの多忙な仕事（その頃は高等学校の教諭として勤務しておりました）をしていましたので、その不安は一層つのるばかりでした。しかし、入学してしばらくすると、そのような不安は少しずつですが、払拭されていきました。入学以前にも、細々と学会発表などの活動はしていましたが、参考文献を集めるのにも大変苦労しておりました。ところが、GSIDに入学してからは、中央図書館をはじめとする名大の充実した図書設備と、情報資料室のスタッフの御尽力により、自分の収集したい文献があつという間に集まってしまうというまさに夢のような環境を享受することができました。加えて、研究に行き詰ると、指導教授は信じられないくらいの多忙な中でも時間を割いて下さり、相談ののつてもらい適切なアドバイスをいただくことができます。それまでの何年も何年も渴望していた大学院生として研究する生活がGSIDにはあつたのです。

また、2年目以降はゼミナールにも出来る限り出席することにしていましたが、これも大学院生として大変刺激になりました。GSIDでは後期課程の院生には基本的には、講義や演習の受講が修了要件になっていないことも、私のようにフルタイムの仕事に従事する者にとっては大変有り難い制度なのですが、こうしたゼミナールへの参加によって様々な意見を聞くことができ、それが論文の執筆にとっても役立つこととなりました。仕事を持つ者にとって勤務時間をやりくりし、大学院の講義や演習に出席するのは様々な障害があることは承知しておりますが、それ以上に得られるものは大きいのではないかと感じます。

この3年間は、私の人生の中で掛替えのない期間になりました。それを与えて下さった先生方や職員の皆様方に少しでも報いられるよう、今後も研究や勤務先の業務にしっかりと取り組んでいきたいと考えております。

新スタッフ紹介



国際開発専攻

助教授 西川 芳昭

2005年4月に国際開発専攻開発マネジメント講座に着任いたしました。これまでJICA及び農林水産省の職員、長崎と福岡で私立大学の教員として、国内外の農村・地域開発の研究と実践を経験して参りました。

大学院まで作物遺伝・生理学を学んでいたのですが、十数年前に専門を社会科学へと転向しました。それは、多くの地域開発において、自然科学の研究者、技術者と社会科学の専門家との十分な対話なしに開発計画が実施されることの危うさに気づき、対話・協働を促す専門家を目指したかったからです。

少し具体的に説明してみましょう。ルワンダで、帰還難民による農村再生プロジェクトに参加したことがあります。そこでは、食糧配布のような伝統的緊急援助に加え、新しい試みが始まっていました。それは、自分たちが播く種子すらもたずに避難した難民の生活を復興させるために、元々村々で栽培されていた作物の遺伝資源を世界中の研究機関から取り寄せ、その種子をNGOが配布する援助でした。国際機関と参加型を標榜するNGOとの連携例として注目すべきものでした。自然科学者が最新のインフラを利用して保存していた品種が、NGOや社会科学者の助けを得て農家の現場へと戻されたわけです。

世界および国レベルでの食糧増産および安定供給の政策の下で、緑の革命等による高収量品種導入が遺伝資源の流出を促進したため、これら遺伝資源の保全を行なう努力が国際的に取り組まれています。地域のレベルでは、それを作り出し日常的に利用している人々の生活にどのような意味を持つかを分析し、関わる人々の投入するコストとそこから得られる利益を踏まえた組織・制度の構築が持続可能な遺伝資源管理に不可欠です。そして、このような議論には様々な専門を持つ人間の協働が期待されています。

国際開発という共通の目的を持って多様な研究・教育が行われているGSIDではこのような研究が可能だと期待しています。GSIDの一員として、諸先輩方、日本の各地域また各国から来られている院生の皆さんとともに対話・協働を促進する研究・教育・実践に携わっていきたく願っています。よろしくお願いたします。



国際協力専攻

助教授 川島富士雄

2005年4月に本研究科に着任しました。専門は国際経済法・経済法です。前者では世界貿易機関(WTO)法を、後者では内外の独占禁止法・競争法を研究しています。

WTO法は物・サービスの貿易及び知的財産権と幅広い領域で国際ルールを定め、かつ守らなければ制裁が下る実効性の高い紛争解決手続を設けています。その分、加盟各国への影響も大きく、WTO法は多方面から批判にさらされています。例えば、WTO法は貿易自由化を重視するあまり、環境保護の価値を軽んじている、加盟各国の主権を奪っているなどなど。1999年シアトルWTO閣僚会議の際の大規模な街頭デモをご記憶の方も多いでしょう。私の研究テーマの一つは、それら批判の妥当性を検証し、WTO法がグローバル・ガバナンスの中で果たしている、又は果たすべき役割を明らかにすることです。

抽象的な話に聞こえるでしょうが、実は身近な、実社会に直結する問題です。WTO法の解釈一つでメキシコのエビ漁に従事する漁師さんが仕事を失い、我々がいつも食べていた食品が食卓に並ばなくなります。WTOに加盟した途上国も、WTO法の活用如何で、経済発展の行方が左右される可能性があります。私の本研究科での教育目標の一つは、世界各国からの学生にWTO法の自国への影響やコスト・利益を正確に理解し、自国の発展のため、それを活用する能力を身に付けてもらうこと(キャパシティ・ビルディング)にあります。これは個々の国にとって重要であるだけでなく、世界貿易体制のバランスのよい発展のためにも不可欠だと考えています。

もう一方の柱である競争法はここ数年、アジア各国において一種のブームとなっています。制定済みのタイ、インドネシア、インド、シンガポール、ベトナムに続き、中国、マレーシア及びフィリピンでも包括的競争法案が検討されています。法制定作業も重要ですが、それ以上に出来上がった競争法をいかに運用するかが、その国の経済発展に大きく影響します。60年近く独占禁止法を運用してきた日本、及び欧米等の経験に学びながら、アジアその他の学生と一緒に各国の経済発展段階や独自性に対応した競争法のあり方を探っていきたいと考えています。

着任後2ヶ月ですでに本研究科の学生の皆さんの意欲の高さと目の輝きに大いに刺激を受け、やりがいを感じています。どうかこれからよろしくお願致します。



国際コミュニケーション専攻
助教授 西村 秀人

本年4月より、国際コミュニケーション専攻に着任いたしました。これまでラテンアメリカの音楽文化、特にアルゼンチンの国民的音楽タンゴを中心として、人の移動・

都市化と音楽文化の変容を主なテーマとして研究を続けてきました。

ラテンアメリカ音楽と出会ったのは高校生の終り頃のこと、それがきっかけとなり大学ではスペイン語を学び、引き続き大学院ではアルゼンチン・タンゴの発展史、およびアルゼンチンの社会状況・経済状況との関連を考察してきました。その後さらに1945 - 1955年のペロン政権とタンゴの関連、欧米におけるタンゴ・ダンスと音楽の受容、キューバ、ブラジル、ウルグアイなど他のラテンアメリカの音楽文化との比較、全世界の旧植民地地域における都市音楽成立過程の共通性、などアルゼンチン・タンゴを出発点としてさまざまなテーマに関心を寄せてきました。

最近では日本におけるラテンアメリカ音楽の受容史およびその受容形態の特徴、ラテンアメリカ・カリブ海地域における移民と音楽文化の移動、という2つのテーマに特に力を入れています。また近年カリブ海の仏領マルティニーク島の文学者を中心に提唱されている「クレオール性」の音楽文化考察への援用というテーマにも近々取り組みたいと考えています。また、具体的な計画は白紙ですが、アルゼンチンの研究者から全世界で行われたアルゼンチン・タンゴの録音のデータ・ベース化に協力してほしいという依頼も受けており、実現の折にはぜひ協力したいと考えております。

本学ではスペイン語の指導はもちろん、「ポピュラー音楽」「ポピュラー・カルチャー」などより広い枠組みにおいてこれまでの研究を深め、他地域にはみられないラテンアメリカ文化の多様性を通して異文化を研究することの重要性を学生たちに伝えていきたいと考えています。なぜか小学生の頃から「ひとのやらないことをやろう」という思いを抱き、その後偶然にもラテンアメリカの音楽と出会って今まで過ぎてまいりましたが、これからは真の文化理解に向けた、より開かれた研究をめざして努力しなくてはいけないと痛感しております。

生まれて以来ずっと関東在住でしたので、名古屋で暮らすのはこの4月からが初めての経験です。何かと不慣れなこともあるかと思いますが、全力で頑張って参りますのでどうか皆さま、よろしくお願ひいたします。



留学生担当
講師 浅川 晃広

2005年1月に、留学生担当講師として着任いたしました。日本の大学院での研究の後、2002年8月より2年間、在オーストラリア日本国大使館の専門調査員としての勤務をへて、この度、国際開発研究科の一員として迎えていただきましたことを感謝申し上げます。私自身、大使館での2年間の勤務の他にも、約1年間オーストラリア国立大学に短期留学したこともあり、留学生として、または外国人として、母語が通じない国で過ごす経験を経てきました。こうした経験を留学生担当講師としての日々の勤務に活かしていきたいと考えております。

1月に着任して以降、特に4月からの新入生の受入準備、オリエンテーションを含めて、奨学金候補者の選考に関する業務、また留学生向けの『実用ハンドブック』の編集・発行など、さまざまな業務を一気に行うことになりました。この間、至らない点も多々ありましたが、皆様のおかげで何とか乗り切ることができたと感謝しております。こうした期間を経て、ようやく国際開発研究科の全体像や、留学志望者への対応のやり方が理解できるようになって来ました。日々、留学志望のさまざまな照会に対応していますが、特に途上国からの志望者の熱意には、大いに圧倒されております。そうした熱意に応えるべく、少しでも業務の質を高めていきたいと考えております。

私自身、留学や海外での勤務を通じて、自分自身の視野を広げ、また研究の幅と深みも広がってきたと思います。こうしたことから、一人でも多くの優秀で、向学心あふれる留学生に、国際開発研究科での教育・研究を通じて、単に勉学面だけではなく、それこそ私自身がそうであったように、「人生を変える経験」にもなりうる留学のすばらしさを体験していただければ、という思いを持って、日々の業務に取り組んでいる次第です。

私自身の研究としましては、「移民政策論」とでも言うべき分野で、研究対象としているオーストラリアなどの「移民先進国」の事例を参考にして、人口減少社会、少子・高齢社会を本格的に迎える日本において、未来を見通した移民政策の構築に一石を投じたいと考えている次第です。国際開発研究科には、さまざまな角度から移民現象に取り組んでおられるスタッフも多数おられますので、一層研鑽を深めてきたいと考えておりますところ、皆様におかれましては、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

名大津波被災者支援院生有志会の活動

インドネシア・スマトラ島沖で昨年12月に発生した大地震と津波により、未曾有の大惨事に見舞われた現地の方々を支援しようと、有志で集まった学生13名は今年1月に「名古屋大学大学院国際開発研究科スマトラ沖地震津波被災者支援・院生有志の会（略称名大津波被災者支援院生有志会）」を発足させた。

1月28日には「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」と題したワークショップを兼ねたチャリティーイベントを開催し、被災状況をよりよく知る契機とするとともに、今後の支援に活かすために意見やアドバイスを参加者から募った。考える会には、学内外から113名が集まり、その中で時間の経過と共に低下する人々の被災地に対する関心を喚起するために、被災地についての情報提供を積極的に行っていく事の必要性が多くの方々から指摘された。

この考える会でいただいた意見を参考に、当会の活動の柱を1) 学生として、2) 中長期的視点で、3) 現地のニーズを最優先するという3点に据え、様々な活動を展開してきた。

4月19日には、名古屋アメリカン・センターとの共催で、米国国際開発庁の民主化・紛争・人道援助局の局長代理であるウィリアム・ガーヴァリンク氏を迎えて講演会を開催した。“Effective Civilian and Military Coordination in Disaster and Humanitarian Operations: the U.S. Experience in the 2004 Tsunami Relief Effort”（災害・人道援助における民間組織と軍隊の効果的な協力体制：2004年スマトラ沖地震の経験）というテーマでの講演後、質疑応答では、今後の復興支援のあり方について参加者の間で活発な議論が交わされた。

さらに6月3日～5日にはインドネシア学生協会と共同で名大祭に出店し、民芸品販売やチャリティーバザーを行うと同時に、被災地の写真を展示し、復興がなかなか進まない被災地の現況を多くの人々に知ってもらえるよう努めた。ここで得られた収益金（155,662円）はPMAJ（Perkumpulan Masyarakat Aceh di Jepang, 在日アチェ州民協会）を通じてアチェ州で被災した子供たちの奨学金として使われる。

当会では現在、被災地域で活動するNGO関係者などを招いての勉強会を定期的に開くことや被災した地域の子供たちに励ましの手紙を送ることなどの実施に向けた準備を進めている。これだけに限らず、被災地の状況や協力を申し出てくれる団体との調整を踏まえた上で、柔軟かつ幅広い

支援活動を目指していく。



名大祭にて、バザーの様子



インドネシア学生協会のメンバーと

Cambodian Student Association in Nagoya (CSAN)

Ngov Penghuy

GSID, Ph.D. program

Cambodian Student Association in Nagoya (CSAN) was established in 2003 by Cambodian students in Nagoya University. CSAN is now composed of more than 30 students from various departments of Nagoya University and other universities in the Chubu region. Among all members, Cambodian students in GSID who are large in number in comparison with other department always play a very important role in the association activities.

CSAN was created in an attempt to strengthen the relationships among all Cambodian students and share our culture with the Japanese as well as international community in Nagoya. For example, every year since the association's establishment, it has held a traditional Khmer New Year's celebration at GSID in the middle of April. This New Year celebration is one of the most important events of CSAN. More than 100 people participate annually, including outsiders, students, and faculty. In the last New Year celebration,



The Cambodian way of greeting



Coconuts Dance

Cambodian traditional dances, songs, and games were performed and traditional foods were also served.

CSAN also regularly hosts study sessions on a variety of topics related to Cambodia. Members of the association are encouraged to present and share their research progress with other fellows. Since Cambodian students here in Japan are conducting their researches on Cambodia in different fields, these study sessions have served as a great opportunity to develop our understandings in an inter-disciplinary manner.

スタッフの人事異動

【教員】

H17.3.31 退職

国際協力専攻国際協力法制講座 教授

佐藤 安信 (東京大学大学院総合文化研究科教授へ)

国際コミュニケーション専攻国際言語文化学講座 教授

小栗 友一 (愛知工業大学教授へ)

国際コミュニケーション専攻国際コミュニケーション講座 助手

加藤 浩樹

H17.4.1 採用

国際開発専攻開発マネジメント講座 助教授

西川 芳昭 (久留米大学経済学部教授から)

国際協力専攻国際協力法制講座 助教授

川島富士雄 (金沢大学法学部助教授から)

国際コミュニケーション専攻国際言語文化学講座 助教授

西村 秀人 (上智大学イベロアメリカ研究所助手から)

【事務】

H17.4.1 転出

事務掛長 長田 昭夫 (愛知教育大学へ)

庶務担当主任 大久保 淳 (総務企画部人事労務課へ)

H17.4.1 転入

事務掛長 武市 全弘 (核融合科学研究所から)

庶務担当 福地 実 (総務企画部総務広報課から)

教務担当 大屋友美子 (研究協力・国際部国際課から)

客員研究員の紹介

【国内客員研究員】

阿古 智子 (姫路獨協大学外国語学部 助教授)

研究題目：現代中国における国家、社会、教育

期 間：平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月

板垣啓四郎 (東京農業大学大学院国際農業開発学専攻 教授)

研究題目：国際開発における日本の農業・農村開発の経験

期 間：平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月

板倉 健 (名古屋市立大学経済学部 講師)

研究題目：世界モデルによる貿易自由協定の研究

期 間：平成 17 年 10 月～平成 18 年 3 月

上別府隆男 (東京女学館大学国際教養学部 教授)

研究題目：ベトナム教育改革と援助協調

期 間：平成 17 年 10 月～平成 18 年 3 月

須藤 季夫 (南山大学総合政策学部 教授)

研究題目：ASEAN 共同体の課題と可能性

期 間：平成 18 年 1 月～平成 18 年 3 月

近藤 久洋 (東京国際大学 助教授)

研究題目：韓国・台湾の開発国家体制

期 間：平成 17 年 10 月～平成 17 年 12 月

町田 宗鳳 (東京外国語大学留学生日本語教育センター 教授)

研究題目：宗教と紛争のリンケージ

期 間：平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月

長町 昭 ((財)国際開発高等教育機構 事業部次長)

研究題目：開発プロジェクトの管理運営手法研究について

期 間：平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月

小林 寧子 (南山大学外国語学部アジア学科 助教授)

研究題目：インドネシアにおけるイスラム・フェミニズムの展開

期 間：平成 17 年 10 月～平成 18 年 3 月

都築 雅子 (中京大学教養部 教授)

研究題目：英語統語論

期 間：平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月

三枝 裕美 (名古屋外国語大学外国語学部 助教授)

研究題目：コンピューターを使用した語学支援教材の開発

期 間：平成 17 年 10 月～平成 18 年 3 月

【外国人客員研究員】

張 鴻 (上海対外貿易学院 副教授)

研究題目：東アジアの FTA (自由貿易協定) と中国経済

期 間：平成 17 年 4 月 1 日～平成 17 年 9 月 30 日

Ngin Chanrith (王立プノンペン大学外国語学部専任講師)

研究題目：カンボジア農村部における人材育成に関する研究

期 間：平成 17 年 4 月 1 日～平成 17 年 8 月 31 日

李 連栄 (中国社会科学院民族文学研究所講師)

研究題目：日中におけるチベット研究の展望

期 間：平成 17 年 5 月 15 日～平成 17 年 11 月 14 日

出版物紹介

『国際開発研究フォーラム 28』

2005年3月11日発行

〈目次〉

- Computational Analysis of the Economic Impacts of Japan's FDI in Asia Shigeru OTSUBO
- Structural Change and its Impact on Productivity in Japan, Korea, and Singapore (1970-2000) K. Ali AKKEMIK
- The Changing HRM Practices of Japanese Firms and the Impacts on Compensation Practices of Japanese Affiliates in Malaysia CHEW Yin Teng
- Assessment of Cooperative Movement in a Developing Country: The Philippine Experience Annie L. DERIADA
- 農業依存型低開発国におけるコミュニティビジネス導入の可能性—ラオスの所得向上活動を事例として— 加茂佐知子
- Decentralization within the Centripetal Expression of State Power: Re-Guiding Cambodian Statutory Devolution PRUM Virak
- A Perspective from the Village in Cambodia: Toward Democratization from Below KEA KIRI Renol
- 死の隠喩と死生観—メキシコ・シティにおける「死者の日」を中心に— 佐原みどり
- ラオス 1991 年憲法体制における県党・行政制度に関する一考察—ヴィエンチャン県を事例として— 瀬戸 裕之
- The Behavior of Public External Debt in Pakistan: A Financial Macroeconomic Analysis Abdul WAHEED
- 氷心の早期の〈問題小説〉—女性の〈死〉がもたらす意義— 虞 萍

『国際開発研究フォーラム 29 (小栗友一教授退職記念号)』

2005年3月18日発行

〈目次〉

- Der deutsche Bildungsroman von Goethe bis Thomas Mann: Zu seiner historischen Entwicklung und seinem heutigen Wert HAYASHI Hisahiro
- マレー文化圏における断り表現の比較—ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して— 伊藤恵美子
- 二人の母—*Leave It to Me* 試論— 小池 理恵
- バイリンガル記憶表象研究—定義上のあるいは方法論的課題の検討— 三宅 恭子
- 矛盾の三十年代前半 (1930-33 年) の批評論ノート 中井 政喜

Untersuchungen zu verschiedenen Konfliktmotiven in Theodor Storms späten Novellen: auf dem Weg zu einer humanistischen Literatur zum Zweck der Rettung und Heilung von Geist und Seele NAKAMURA Osamu

構文の基本形と変種—文法事項の配列順序への示唆—

大室 剛志

日本語母語話者の雑談における「うん」と「そう」—フィーラーとして用いられる場合— 佐藤有希子

「書くこと」による冒険—カフカの創作方法と作品におけるゲーム的世界— 須藤 勲

アメリカ先住民と信教の自由—ローカルな聖性をめぐって— 内田 綾子

日本華僑による文化提示とエスニック・アイデンティティの主張—神戸華僑歴史博物館の考察を中心に—

張 玉 玲

21号以降の『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記 URL アドレスより全文閲覧可能。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>

お知らせ

オープンキャンパス 2005

皆様のご来場をお待ちしております。

日時：7月15日(金) 13:00-16:30

会場：名古屋大学大学院 国際開発研究科棟
地下鉄名城線「名古屋大学」下車

内容：

- (1) 全体説明会 13:00-14:10
専攻及び教育プログラムの特徴
GSID の入学生の構成、就職先
特色ある講義紹介
院生による特色ある社会貢献活動
GSID での学生生活 (院生会)
入学試験の説明など
- (2) 専攻別説明会と個別相談 14:20-15:20
各専攻別説明会 (教育プログラムを中心に)
個別相談 (教員と院生が対応します)
- (3) 留学生相談、施設見学 15:30-16:30
見学できる施設：情報資料室 (図書室)、言語情報処理室 (コンピュータールーム)
- (4) 展示 11:00-13:00、15:00-16:30
海外実地研修、国内実地研修について
研究科出版物

お問い合わせ先：opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp

ホームページ：http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/osada/opencampus.htm